

## 芦峯寺うば尊の性格とうば尊像造立の背景

—山姥の伝承から—

米原 寛\*

### はじめに

立山信仰の展開は、第1期は、10世紀初頭から鎌倉時代初期まで。第2期は、鎌倉時代初期から南北朝時代まで。第3期は、室町時代初期から戦国時代末期まで。第4期は、江戸時代初期から明治時代初期まで。第5期明治時代初期から昭和初期の5期に大別することができる。こうした展開においていわば都人や僧籍や修験者といった特定の身分の者の「山岳信仰」の「場」であった第2期・第3期、「修験」や密教・浄土教などといった特定の宗派色が薄れ、中世の宗教的呪縛からの開放、交通や流通経済の発達などによる庶民の活動の広域化などにより庶民的山岳信仰の色彩が強まった第4期における立山信仰の中核となったのが、鎌倉時代に立山の山麓にある宗教村落芦峯寺に発生し、江戸時代には布橋灌頂会の中心となった民俗信仰である「うば尊信仰」を除いては語るができない。

江戸時代芦峯寺が加賀藩に差し出した寺社来歴をみても芦峯寺の書上にはほとんどうば堂のことに終始している。またうば尊の「うば」は姥・祖母などと書くが、16世紀の終わり頃には「媯」と書いた<sup>1)</sup>。「峯」と同様に立山信仰独自の造字で、このような特殊な字を充てたというところにも、うば堂が芦峯寺の信仰上いかに重要であったかがうかがえる。

芦峯寺のうば尊については、昭和39年に広瀬誠の「立山御姥信仰の一考察」(信濃16-1)、同39・40年に石原与作の「立山中宮寺媯神の性格」(富山史壇29号・30号)、昭和40年に米沢澤康が「立山媯尊信仰の源流」(芸林16-4)などの先行研究がある。

これら先行する媯尊研究は、広瀬・石原・米沢の3氏とも『立山縁起』や『和漢三才図会』など江戸時代に著された資料を素材としてうば尊の性格について論じている。広瀬氏は「うば尊を農神とすべきではなく、本来母神にして冥府神といった性格であった」とする。石原氏は「塞の神から地母神穀母神化し、三転して生殖神として崇敬を受けたもの」。また米沢氏は「竜蛇神であるウバ神から三途川の奪衣婆の如き具象化されたう

\*富山県 [立山博物館]

ば尊へと変化したもの」としている。石原・米沢両氏はうば尊は「変化するもの」としてとらえ、広瀬氏はうば尊は「本来変化しないもの」ととらえている。

いずれの説も否定し難いものであるが、それはとりもなおさず広瀬氏が指摘する「うば尊の神格はまことに複雑で、山姥、山神的な性格、橋の袂を守る関の神的・道祖神的な性格も併せもっている」<sup>21)</sup>といううば尊の多様な性格からくるものであろう。

本稿ではこのようなうば尊の多様な性格を芦峯寺に伝存するうば尊像が南北朝期の永和2年(1375)に像立されていることに着目し、当時うば尊像を像立した芦峯寺の人々のニーズやうば尊像に託した願いは一体何であったかを、里山である芦峯寺の立地や生業、当時の宗教的背景などから、古来全国的に伝承されていた「山姥」との関わりについて民俗学の先人の研究を引きながら考えていきたい。

## 1 芦峯寺のうば尊像造立の背景

芦峯寺のうば尊は、南北朝時代の永和2年(1375)の銘をもつ。このうば尊が刻まれた背景には何があったのであろうか。うば尊像造立の背景はとりもなおさずうば尊信仰の成立の背景である。

うば尊像造立の背景のひとつに、立山信仰の変質が考えられる。即ち、平安時代後期からの地獄の山に加えて南北朝期には阿弥陀の山という性格が付与されたことである。

鎌倉時代には帝釈天像や閻魔王像などの仏像にみられるように、立山は強い地獄信仰に彩られていたが、南北朝期に著された安居院『神道集』には阿弥陀如来の山として記述されているように、立山もしだいに阿弥陀の山の性格が付与されていったのである。しかし芦峯寺においては阿弥陀如来像の造立はなかったものと思われる。現在「一山会文書」として残されている古文書の文言にも「阿弥陀堂」の堂宇の存在は確認できない。うば三尊はこうした時期に製作されている。考えるに地獄信仰の強さ故に閻魔王像に匹敵する阿弥陀如来を造立できず、しかし芦峯寺衆徒の意向としては阿弥陀如来像、ひいては阿弥陀信仰の気配は何らかの形で造りたかったに違いない。それ故に伝統的な山の神信仰を代替えに導入し、当時広く民俗信仰として伝承されていた「山姥」伝説の像影を仮託したのではないだろうか。うば三尊像は即ち阿弥陀三尊像の姿にオーバーラップするものと考えたのであろう。そのように考えないと、全国に唯一の媮三尊像の存在が理解できないのである。

さらに阿弥陀如来造立の代替えとして造立され、「山姥」伝説の像影を仮託されたうば三尊像の造立の背景あるいは動機は芦峯寺の立地状況にあると考えられる。

芦峠寺地域は本来常願寺川の上流にあって立山山麓の「山の民」である。「山の民」とは具体的には畑作を基盤とし、伐木（樵）・猟師・炭焼き・木地屋といった特殊な生産で一般の里社会と一定の距離を保ちながら、つかず離れず、同時に里社会との間に文化的境界を維持してきた集団を「山の民」というのである<sup>31</sup>。こうした「山の民」は「焼畑に支えられた特有の生活文化」の伝統を有している<sup>31</sup>。

それとともに、森や山のさまざまな場所に住み、山中異界の神として、人々がそれぞれに加護を祈るような「山の神」の信仰とその儀礼が山村地帯に広くみられることが指摘されている<sup>32</sup>。「山の神」を特徴づけるものとしてあげられるものは「山の神」信仰である。山の神はそもそも山の守護霊だとおもわれる。里の民は山の神を先祖の霊の一変形とみるに対して、山に実際に生活している山の民にとっては、山の領域を守護してくれる神様だから、丁度里の民にとっての氏神さまのような地域の守護霊というふうを考える。この守護霊は即ち「山姥」である。さらに柳田国男は姥神が恐ろしい神となったのは「山姥即ち深山に住する生霊の事蹟と結合してから後のことで、それ以前は単に不思議の力殊に長寿ということが最も顕著なる特性であったかとおもう」<sup>33</sup>と記している。言うなれば深山に住する女性がしだいに年を重ね長寿という不思議な力が備わったというのである。

次に「山姥」伝説に仮託されたうば尊の性格を「山姥」の性格と比較してみることとする。

#### ア. 境界神としての性格

うば尊には「山姥」の性格の一つである「塞の神」（関所・境）の性格を見立てることができる<sup>34</sup>。芦峠寺のおんば堂の西側を流れるおんば堂川はこの世とあの世との境界であり、この川を越えるとあの世即ち他界に踏み込むこととなったのである。その証拠に芦峠寺集落の墓地はおんば堂川を越えておんば堂の北側に立地しており、この墓域は現在は少し南側に移動しているが今なお鎌倉時代の石仏がの遺されている。このことから、姥尊は境界神として、またおんば堂川を越えると他界即ち聖なる地域であることから、おんば堂は修験道にいう結界でもあったのである。

#### イ. 山姥と焼畑と豊穡

「山の民」の文化とは、①焼畑で栽培された多種類の作物を生産の基盤としながら、②山野に自生する植物や動物を、きわめて多面的に採集・狩猟し、それを利用する生活様式に特色が見られる<sup>35</sup>。野本寛一は『焼畑民俗文化論』<sup>36</sup>の中で焼き畑と明確につながりのある山姥伝説を紹介している。また「土佐山中において山姥は焼き畑の豊穡神として確かな位置を占めていたと考えられる」とのこと。山姥のご

機嫌を損じる作業すると山姥が飛び去り、それ以降は作物がとれなくなり、間もなく没落した家もあったという。さらに野本氏は「金太郎は地母神たる山姥を母とし、焼畑の神だったのではなかろうか」<sup>10)</sup> といっている。

芦峠寺の媮尊については「立山略縁起」の中で、「抑、天照大神宮此世界を開闢し玉ふ時、立山御媮三尊は右の御手に五穀を納め、左の御手には麻の種を執持し、即ち越中立山芦峠に天降りたまひ、五穀麻の種を法界に弘め、一切衆生の衣食をあたへ、生長し、仏法の本源をたもち、終には寂滅の本土に帰る」と記述されている。『加能越金砂子』や『加能越寺社由来并古蹟記』等にもこれと同類の文を載せている。

このような姥尊の豊穡を司る性格は、山姥の焼き畑の豊穡神として確かな位置を写し込んでいると考えられる。大護八郎の『山の神の像と祭り』において「山之神の基本的性格はもの皆豊穡多産を司る神であることは、多岐に文化した信仰の中で唯一環した性格である」<sup>11)</sup> と記している。また「山の神の気の荒いことは、焼畑あたりから導き出された火の猛威にも関連がありそうである」とも記している。

また「左の御手には麻の種を執持し」とあり、機織りの伝承も加えられている。山姥と機織りとの関係については、謡曲「山姥」柳田国男・折口信夫・吉田敦彦・小松和彦等が採集した数多くの伝説がある。立山周辺においても、『青搦泉達録』に載せられている越中神話「姉倉比売と能登比売との争い」の中に、姉倉比売を加勢する布倉媛が登場する。この姉倉比売、能登比売、布倉媛いづれも機織りに関係する女神である。布倉とは芦峠寺より下流の横江にある尖山のことである。布倉媛の布という文字からも機織りが連想され、『越中志微』には、布倉岳は「俗に伝ふ、昔山姥住し所也。或は仙境也と云」と記載されている。

#### ウ 山姥と姫神とうば尊

山姥は伝説の創案当初から「老女」として存在せしめられたのであろうか。否である。山姥の性格の一つに「寒の神」、即ち境界神という性格があることは先に指摘した。この境界神は本来山姥のもつ特異な性格ではなく、二尊院本・浄福寺本十王図において描かれた「剣の山と女」の関係から女は異界の境界に位置する若い女神であろうと鷹巣純氏は指摘した<sup>12)</sup>。さらに立山曼荼羅の来迎寺本や相真坊本に剱獄の山頂に十二単をまとった若き女性が一人描かれている。この女性について鷹巣純は「女神は立山という異界の北の境界にそびえる剱獄に鎮座する女神ではなかったか。」と指摘している。柳田国男は姥神伝説について、山姥は「深山の中に老女の靈威なる者が居って種々の不思議を現ずるといふ伝説である。女神信仰の最後の

変形と見て宜しい」<sup>13)</sup>、と論じている。山姥は姫神が歳を経て霊力をもった老女となったのである。立山の姥尊は立山曼荼羅の中で自らの前身である姫神の姿を写し込んだのであろう。また先にあげた柳田国男の『石神問答』では、山姥は女性の山人のことで、山女・山姫とも申す地方がある」とも記している。

## エ. 醜貌

芦峠寺の姥尊に限らず多くのうば尊の容貌は山姥の伝説と融合して怪奇醜悪な姥・形の姿で偶像化されている。堀田吉雄の『山の神信仰の研究』に「山姥は醜貌と粗暴と、もう一つ多産という三属性は、女性の山の神が最後まで負っている本姓の面目である」「山姥は、鬼と同様新旧二様の姿があって、一は人間の禍をもたらし、一は福を授けているのである。勿論妖怪型が凋落の姿で、後者が一段と古い山姥である。多くの子を産み育て、村人が幸福をもたらす山姥は、祖霊にまで逆上りうるものであろう」と。また縄文時代の土偶のように醜悪な容貌は何らかお霊的威力を発揮しうるものの視覚的偶像であろう。土偶は出産の苦痛の姿を写しているともいわれ、山姥も同様にその醜貌は多産によるものと考えられる。

堀田吉雄によれば、「山の神の醜貌は世間周知のことであるが、さてその理由は何人も言及したことがない。これも山の神が元来多産豊穡の神であったから、その顔貌も亦分娩の陣痛を表現した苦渋の顔付を示しているものと解するのである。」「日本の先史土偶は、一応神象で狩猟ないしは原始農耕文化に伴い、豊穡多産を祈願する性格のものであると仮定するならば、民間信仰の山の神の性格とほぼ一致するわけである。」<sup>14)</sup>

先にあげた柳田国男の『石神問答』では、姥尊は本来「オボの祭典に奉仕する女性」であったが、後に山姥の伝説と融合して怪奇醜悪な姥形の姿で偶像化されたものと想像することもできる。

私がかつて見たことのある足柄山の地藏堂（南足柄市）にある「山姥像」を思い出し写真で確認したところ、片膝は立てていないが、容貌・肋骨が浮きだした胸の様子はまさしく姥尊の姿であり、立山町芦峠寺に伝えられてきたうば尊像や大町市西野口の西正院の大姥尊像に類似している。山姥のイメージがうば尊の像形を造り出したのであろうか。うば尊の背景には「山姥」の記憶が色濃く包含されていることがうかがえる。

## オ 石にまつわる伝説

姥神伝説には石にまつわる伝説が多い。特に姥の名のついた石があちこちに遺されている。立山山中に止宇呂尼伝説にまつわる姥石・鏡石があり、木ではなく石で

造られた嬭尊もある。江戸時代の『雲根志』に珍しい外観の石として、立山地獄谷で得られた「山姥の握り飯」という石の記事と、京都東山産物会に出品された越中産「山姥の鑿」の絵入り記事がある。姥神伝説には「石の崇拜と関連して居る」のではないかと柳田国男は言及している<sup>15)</sup>。

## まとめ

以上のように「山姥」伝説として古来付与されていた性格を①境界神、②山姥と焼畑と豊穰、③姫神とうば尊、④醜貌 ⑤石にまつわる伝説などの点から芦峯寺うば尊とを比較してきたが、結果嬭尊は「山姥」の一変形とみることができる。即ち、永和元年(1375)の嬭尊像は立山山麓でかつ里山という芦峯寺の立地を背景に全国的に広がりを見せていた「山姥」信仰を基相に像立されたものと考えることができる。その後立山本来の地獄信仰に加えてしだいに広がりをもせた阿弥陀信仰に取り込まれ、江戸時代には閻魔堂、布橋、おんば堂が一体となって擬死再生の儀式「布橋灌頂会」が創出され、女性救済の中核として全国に多くの信者の崇敬を集めたのが嬭尊である。古来時代の変化とともに変質していく立山信仰の中で基相となったのが嬭尊であると考えよう。

## 註

- 1) 芦峯寺一山會文書・木倉豊信『越中立山古文書』、天正12年の佐々成政の立山中宮寺大衆生徒社人宛の安堵状に「嬭堂之威光承届候」として「嬭」が充てられている。
- 2) 廣瀬誠『立山黒部奥山の歴史と伝承』
- 3)～5)・8) 米原寛「山の民の祈り」(県民カレッジテレビ放送講座『山に暮らす』)
- 6)・13)・15) 柳田国男「伝説の系統及び分類」(『定本柳田国男集』第5巻) 筑摩書房
- 7)・15) 石田明夫『おんば様』「知られざる信仰」・歴史春秋出版株式会社
- 9) 野本寛一『焼畑民俗文化論』雄山閣
- 10) 野本寛一「焼畑文化の形成」(『山人の生業』大林太良編・日本の古代10) 中央公論社
- 11) 大護八郎『山の神の像と祭り』・国書刊行会
- 12) 鷹巣純「六道十王図のコスモロジー」

14) 堀田吉雄『山の神信仰の研究』（増補改訂版）光書房

なお、全体において齊藤泰助『山姥の記憶』（桂書房）・菊池武『我が国の擬死再生儀礼と立山布橋大灌頂会』（後篇）（富山県立山博物館調査研究報告書）を参考にさせて頂いた。